「死別」を語る
── 遺児たちのセルフヘルプグループのばあい ──

Conversation about bereavement
— in Orphans' Self-Help Group

時　岡　　新

Arata TOKIOKA

はじめに

筆者は1999年頃から父親や母親の他界した子ども，遺児たちが体験や心情を語りあう活動の調査，分析を続けてきた。それはおもに語りあいとその前後の時間に照準し，活動の場面の構成や遺児たちの変化の自覚を考究したものである。やがて，2012年，ひろく遺児たちの死別体験を追い，語りあいのずっと以前すなわち死別のときから，語りあいの時間をおえた後の生活までをふくみこんだ臨床心理学的研究，倉西宏『遺児における親との死別体験の影響と意義 ── 病気遺児，自死遺児，そして震災遺児がたどる心的プロセス ──』（倉西 2012）が発表された。この研究には筆者が焦点化しなかった死別体験そのものの分析や，社会学的アプローチとは異なる遺児たちの内面にせまる知見がゆたかに示されている。筆者はみずからの調査，分析を倉西の画期的な研究成果のもとでふたたび鍛錬し，両者の統合を図りたいと考えてとりくみ本稿とした。なお，倉西の研究は「遺児における親との死別体験の意義を見出し，さらにそこに流れる心的なプロセスを見出すことを目的」（1-2）として広範な射程を持つが，筆者はその成果を遺児たちの語りあいの経験に適用し，解析を深化させる。倉西が研究の「入り口」（1）のひとつに挙げた語りあい経験の検討を，筆者はここで独立した研究対象・課題として扱うわけである。

稿の冒頭に，用語法をめぐるいくつかの断りを記す。遺児たちが体験や心情を語りあう活動は，具体的な固有名詞をのぞいてもなお，さまざまな呼称を与えられている。以下では具体的な固有名詞の代わりに「わかちあいの会」を用い，またそのような活動を一般的に表すばあいに「わかちあいの場」と書き示す。本稿の議論のかぎり両者は互換的に理解されてさしつかえない。また倉西はそのような活動をセルフヘルプグループ ── 当事者どうしが相互に支援しあう活動，「わかちあい」とはそのなかで苦しみや経験などを話して共有する時間の一般的な呼称である（伊藤・中田編 2001）── と認識してその語を当て，本文中ではＳＨＧとも略記しているが，本稿でもこれにならった。筆者じしん，過去の論考では「わかちあいの会」を Self-Help Group と英訳している。なお通例，文献からの引用はたとえば（時岡 2018: 33-4）のように文献注を付けるのが社会学のやり方だが（日本社

会学会「社会学評論」スタイルガイド），本稿では倉西の著書から引用する箇所にかぎり先にした（1-2）のように引用ページ数のみを示す。

１．対象と方法

本稿がもっとも多くをたよる倉西の研究成果は，目次で示せば次のようにまとめられている（ii）。

第1章　本研究の問題と目的
第2章　親との死別が引き起こす家族，他者，喪失対象との関係の変化
第3章　遺児のセルフヘルプグループの意義とその心的プロセス
第4章　遺児における死別体験の位置づけとその変化
第5章　自死遺児が抱える死別体験の影響とその位置づけ
第6章　阪神・淡路大震災遺児における震災と死別の影響とその意義
第7章　総合的考察と今後の課題

これらのうち第2章から第4章を本稿の各節でみていくのだが，なかでも第3章で中心的にとりあつかわれる遺児のセルフヘルプグループの参加体験について，筆者のこれまでの調査，研究やその他の研究と対照させながらくわしく吟味したい。対象とする遺児のＳＨＧすなわちわかちあいの場は，筆者の研究，倉西の研究いずれも同様に設計，実施されている。筆者が対象とした活動については，主催団体による紹介を示す（自死遺児編集委員会・あしなが育英会編 2002: 239-40）。

（前略，夏休みの数日間，青年の家などに集まった高校生，大学生たちが）10～15人前後のグループに分かれ，大学生の遺児3～5人がリーダー役として弟や妹のように一人ひとりの面倒をみる。現在は，病気，災害，自殺などすべての死因で親を亡くした子，親が重度後遺症の家庭の子が参加するため，グループ割りでは，親の死因，父母のどちらを亡くしたか，両親のいない子，親が闘病中の子などが孤立しないように配慮している。（中略）もっとも重要なプログラムの「自分を語ろう（自分史）」。（中略）この時間には3つのルールがある。①語ったことは，他では話さない，②話したくなかったら話さなくてもいい，③仲間の話を批判・助言しない，ことだ。心の痛みや癒しのプロセスは千差万別であり，ため込んできた思いを「吐き出し」やすいように最大限の配慮をする。（後略）

これらのうち「自分を語ろう（自分史）」が本稿の照準するわかちあいの場であり，前後して書かれている「大学生のリーダー役」「グループ割り」「配慮」などが議論すべき場の構成要素である。

次に倉西が対象とした活動について，倉西による紹介を示す（71）。

（前略，遺児たちが参加した）ＳＨＧは「様々な死因の遺児同士によるキャンプ活動」である。（中略）スタッフはＳＨＧの参加経験があり事前の研修を受けた遺児大学生が担い，運営側の団体Ｌの職員も幼少期に親を亡くした人を中心に実施された。内容は3～5泊の宿泊を伴い，野外活動やグループワーク等の一般的なキャンププログラムに加え，親との死別体験を語り合う時間が盛り込まれており，その語り合いの時間を中心に据えて実施されている。（後略）

これらのうち「親との死別体験を語り合う

時間」がわかちあいの場であり，また「一般的なキャンププログラム」には，本稿では取り上げないが「語り合いの時間」をいっそう充実させるための工夫が随所にこめられている。

ふたつの活動は，筆者と倉西それぞれが研究の対象とし調査にあたった時期や地域のずれをふくみ，完全には一致していないが，少なくとも本稿が照準する遺児たちのわかちあいの場，語りあいの経験についてはじゅうぶんに相似していると判断される。なお，倉西は文献表には団体名の知られるそれを挙げているが，本文中は「民間の団体Ｌ」の表記にとどめている。したがって両者の同一について，これ以上は詳説しない。

筆者，倉西のほかにもいくつかの関連する遺児の経験の記録を参照，引用しつつ，本稿はそれらを大別二つの道すじに沿って整序し考察する。すなわち，一つには，当該のＳＨＧの構成の特質と，その構成が遺児たちの体験，心情を語りあう場をどのように性格づけるかを明らかにする。またもう一つには，遺児たちがたがいに話し，聴いた経験が，かれらの自己概念をどのように変化させ，あるいは新しく形成するかを明らかにする。自己概念とは「自分が自分に対して比較的持続して有している概念，また，それらを統一的に表現できる本質的な特性概念」（安藤・押見編 1998: 66）だが，本稿ではとくに死別体験をめぐり自己と他者がよせる評価に由来して形成されるそれに注目する。考察にあたっては遺児たちが言葉で表した経験の個性を消失させないために無用の標準化 ── 数値化や測定など ── は施さず，示された言葉の意味的な連関を重視しながら吟味し，かれらの主観的体験の分析に努める。

まず2節では，死別やその後の生活経験をつうじて醸成された遺児たちの心的傾向をつかむために，倉西の「第2章」を中心に筆者の調査，分析のなかからも関連する語りを俎上にのせる。3節ではＳＨＧの参加経験によって生じた遺児たちの変化を紹介する倉西の「第3章」を議論の端緒として，その変化をうながすようにはたらくＳＨＧのなりたち，構成を筆者の調査，分析にもとづき詳説する。4節は遺児の変化がかれら自身にどのように自覚され，あるいは具体的な行動に反映しているかをＳＨＧの構成，活動と結びつけながら考察したものである。おおよそではあるが2節から4節にむかって，ＳＨＧへの参加以前，わかちあいの経験それ自体，ＳＨＧ参加以後という時系列に沿いつつ議論を展開する。

2. 消極的な自己概念の醸成

倉西は1つめの研究「第2章　親との死別が引き起こす家族，他者，喪失対象との関係の変化」を次のような問題提起から始めている。すなわち「死別体験は，死別そのものが大きな体験であるため，喪失対象との別れや喪失対象との内的関係性にばかり注目されがちであるが，遺族は喪失対象との関係だけでなくそれ以外の他者との関係が変化する場合がある」。また「他者との関係は自己が存在することにおいても重要」なのだが「他者との関係の変化が死別体験の捉え方やその後の生き方に対してどのように影響があるのかについての研究も少なく，遺児についてとなるとほとんど見当たらない」，と（31-2）。すでに述べたとおり，筆者の「わかちあい」研究もまた，語りあいの過程いぜんの遺児たちの経験についてはそれ自体を焦点化して聴きとり分析するものではなかった。したがって倉西の「第2章」は微細にたしかめ，じゅうぶんに学ばなければならない。ただし紙幅の制約から，本稿の関心にしたがい，家族，他

者，喪失対象のうちとくに他者との関係に重きをおいて見る。

研究により明らかにされたのは「【他者との違いの感覚】」と総称されるさまざまな関係性である。「遺児は他者に対して死別したという事実さえも隠し秘めておく《死別の隠秘》を選択する。そうして人に話せず自分だけで抱えているうちに，親をなくしたのは自分だけだと体験するようになり，自ら自分を他者から疎外する《自己疎外》の状態に至る。（中略）《他者からの配慮》は他者の振る舞いをよそよそしくさせ遺児にとっては《疎外感》を感じるだけになってしまうことがある。これらの中で遺児自身も《家族や死に纏わる話題の回避》を行うようにな（る。中略）。この他に，両親健在の家族を羨ましく思うものの自分には無理だと諦めざるをえない体験《両親健在家庭への羨望と諦め》も積み重なり『こんなに不幸なのは自分だけだ』という状態に至り《世界における孤独》までも体験していく」（40）。しかし，またあわせて，死別という独自の体験は遺児たちに「《死別という個別的体験を有していることへの自覚》」を持たせたり，あるいは他者との間で「《死別体験の共有化》を図ることで，《他者との深密化》へと関係が展開される」すなわち「【他者とのつながり】」が生じることもある（40-1）。本節ではこれらのうち相対的に否定的な感覚に照準し，末尾で挙げられた《自覚》《共有化》《深密化》は次節以降で詳しくあつかうことになる。

倉西の分析が示す諸特性が典型的にあらわれた遺児の言葉を関連する他書から引用しよう。おさない頃に父親が病気で他界したある中学生は，こう綴った（あしなが育英会編 1997: 92-3）。

（前略）

私にはお父さんがいないということを知らない友達に，

「うちのお父さんは普通のサラリーマンだよ」

と嘘をついたことがあります。この時，初めてお父さんのいない淋しさを実感しました。

時々，「もしお父さんがいたら」と，思うことがあります。

今みたいなせまい家じゃなく，自分の部屋がある大きな家に住んでいるかもしれない。欲しいものがなんでも買えるかもしれない。

（中略）

こんな夢みる私の周りの友達はあたり前のように過ごしている。そう思うと，仲の良い友達でも憎らしく思います。

（後略）

引用の前半からは「嘘」「普通」，後半からは「夢みる私」「あたり前」の語に注目したい。書き手は自身の状況（父親がいない）を「普通」でないと見て，また「普通」であることが価値的に優位であると判じるから「嘘」をつく。あるいは父親がいるのが「あたり前」の暮らしであって自分はそうではない，すなわち「夢みる私」は劣位の存在なのである。倉西が示した【他者との違いの感覚】はやがて遺児のなかに《自己疎外》《疎外感》などをともなう消極的な自己概念を醸成していく。

遺児たちの自己概念にたいする他者のかかわりをさらに詳しくたしかめていきたい。社会心理学の知見によれば，私たちは幼少期より「身の回りの他者が自分に示す態度や行動を利用して，その他者の視点から自分をとらえ」る，あるいは「身の回りにいる他者との（中略）相互作用を介して，自分自身の姿を明確にし，修正している」（安藤・押見編 1998: 70-1）。筆者の調査のなかでは，ときおり，遺児たちからそのような自己概念の醸成過程が話されることもあった。

事例2－1（時岡 2004: 202）
ふだんの中で，学校の中で，自分は何かしらみんなと違うってものが，つねに感じるんですよ。クラスの名簿を配られる時がものすごい嫌だった。保護者のところに自分のお母さんの名前があった。でも他の人はすべてお父さんの名前。そういうのをずっと，生活していく中で感じ続けて，自分はみんなと違うんだっていう意識が生まれてしまっている。

事例2－2（時岡 2003a: 114-5）
父親がいないことにたいするコンプレックスっていうのが大きくて。僕は3歳で父親を亡くしてるんで，物心ついた時点でいないわけですよ。（するとその後）父兄参観であるとか，誰々は日曜日にお父さんと遊んだとか，そういう日々の生活の中で，他の人とは違うんだっていうカベを見せつけられる時がありますよね。その時に，俺は他の人より劣ってるんだって（思うようになったのかもしれない）。／父親が死んだっていうことを言うと同情されそうで。いままで仲良くしてた子たちとの空気が，一瞬でも変わる。その瞬間が非常に怖いんですよ。だから，劣等感と，同情をもたれることが怖くて（父親の死，不在を友だちには）言えなかった。（機会があってそれを言えば）そん時に必ず出てくる言葉，「ごめん」っていう一言なんですよ。「お父さんの仕事，なに？」「や，死んでるから」「あっ，ごめん」。その時の雰囲気の変わりようがやっぱキツいですよね。

ふたつの事例は【他者との違いの感覚】が具体的なできごとに由来して遺児自身みずから与えて醸成されるさま，同級生や友だちとの相互作用の過程のなかでくり返し立ち現れてくるさまを端的に教える。クラスの名簿には母親の名前が少なかった，父親の名前にくらべて数の少ない事実が「みんなと違う」意識を生む。あるいは父親がいないことを友だちに話したときの友だちの応答，「ごめん」とはそこでは謝罪ではなく同情の言葉として遺児に聞かれる。これらの複雑な回路を倉西は要領よくまとめて次のように示している。「遺児であるということは周囲からは個性として認められず，単なる異質性としてのみ意味づけられているように思われ，周囲は差別の意識が無くとも無意識的に排他的な態度になってしまっている」（44）。また倉西はここでさらに，たんに家族の誰かと死別した経験にとどまらず，死をめぐる話題の回避がやがて「他者との全般的なかかわり自体が回避的になっていく」可能性にも言及している（44）。それはどのようなありさまであろうか。

ふたたび社会心理学の知見によれば，人は「環境に対しより望ましい適応をはかる」意味から「自己に関する不確かさを減少させようとして他者と自分を比べ」て自己評価を行う。そうして人は「自己の適性や自己の意見の妥当性を知」り，「自分は何ができ，何ができないかを知るとともに，自己の意見や要求水準を変えたり，自己の意見の正当性を感じ取ったりする」。そのとき人は「概して自己と類似した他者との比較をしがちである。類似した他者との比較により，安定した自己評価が可能となるからである」（安藤・押見編 1998:98-9）。ところが遺児たちは身近におなじような遺児がいない（知己を得ていない）ために類似した他者との比較は容易でなく，ほとんど不可能である場合もまれではない。筆者の調査のなかでも次のような経験が話された（遺児の語りを筆者が言葉を補いつつ要約している）。

事例2－3（時岡 2004: 208）
（前略）「交通事故は保険もあるから，父親が

亡くなったために家計はむしろ安定したくらいです」。以後，家屋の改築や自動車の購入など事ごとに向けられたのは，周囲からのひがみやねたみだった。「『なんでお父さんがいないのに車を買うのか』と近所の人が訊く」。母親も祖母もまわりの目を気にした。S君には人びとが自分たちを「一つ下に見ている」ように思われ，それに同調するように「『自分は目立ってはいけない存在なんだ』と控えめに動くようになった」という。

かれの身に起こったのは，父親との死別それだけである。それだけのことを，周囲の人びとはいくども，くり返してかれに言う。なぜお父さんがいないのに云々，と。父親がいないという一つの違いはかれの生活すべてを覆い尽くす周囲との断絶にまでひろがり，劣位の自己評価を余儀なくさせる。それはやがて，倉西の言うとおり，他者とのかかわりすべてを回避的にした。

さて，ここまでに見た遺児たちの自己概念は，いずれも「自己の姿への評価」の諸過程に沿って醸成されたものである。一般に「われわれの自分自身に対する評価は他者の存在によって大きく影響される」のだが，それは他者からの評価，他者に関する情報に大きく影響されるとともに，どのような次元が評価の対象になるかということそれ自体が社会的に規定されたものである（山口 1990: 112-3）。「社会的」とはひろく全体社会を意味する場合も，遺児たちの通う学校，学級ていどの範域を意味する場合もあるだろう。これらの諸過程に当てはめるならば他者からの評価は，父親の死，不在を知った友だちが「あっ，ごめん」と言って返したり，なぜ父親がいないのにそれを買うのかなどと訊く近所の人たちの言葉につよく含まれている。他者に関する情報としては，クラス名簿の保護者欄に父親の名前が多いこと，友だちが日曜日に父親と過ごした話をする機会などが挙げられる。評価の対象が社会的に規定されている実状は，倉西の紹介した両親健在の家庭を羨ましく思うさま，そうでない自分を「不幸」と判ずるさまに見てとることができる。遺児たちの日常にはこれら「評価」の次元が否応なく，細大かまわず押し寄せるのであろう。

倉西が明らかにした【他者との違いの感覚】は，他者との関係という回路を経て遺児が自己についての比較劣位の認識を醸成する過程の複合である。じじつ，かれらには父親あるいは母親がいない，しかしそれ自体には本来的な価値の優劣はないはずである。そこに押しつけがましい同情の言葉やひがみ，ねたみまでもが価値剥奪的に作用していくのだが，さらにくわえて故人の他界の経緯や人びとの好奇のまなざしも遺児たちをいっそう孤立させてしまう。筆者の聴いたある自死遺児の経験から。

事例２－４（時岡 2003a: 115-6）
（前略，小学校）一年生のころの担任が，すごい，いろんなこと訊いてきた。お父さんなんで死んだの？　とか，お金（生活費）とかどうしてるの？　とか訊かれて。でもさ，子ども心に，そんなん言えないじゃん，自殺とか。お母さんに（は日ごろから父親が他界した経緯については）胃がんで死んだって言いなさいって言われてて。それで，胃がんで死んだとか言ってて。

その担任に倣ったというわけでもないだろうが，クラスの子どもたちもまた同じようであったらしい。「その頃ってみんな好奇心丸出しだからさ，『なんで？　なんで？』って訊くじゃんね。その子たちにもたぶん『胃がんで死んだ』とか言ってた」（時岡 2003a:

116-7）。いうまでもなくそこには自殺をめぐる社会通念が影を落としている。しかしそれよりもむしろここで注目すべきは，口止めされている事実を何度も訊かれ，言わないでいると，それが後ろめたいことであるように思われてくる認識の回路であろう。先にみた「事例2－2」では父親の不在を言わないように努めた経験が語られたが，そこではついに不在それ自体までが後ろめたくなる。【他者との違いの感覚】はこうして，遺児たちに外来の「評価」をみずからのうちに取り込ませ，それへの黙従さえ強いる。

最後にもうひとつ，かれらの自己概念の特性を挙げておきたい。それは，往々，かれらの心のうちや否定的な自己概念は表出されず，他者に知られにくいという実状である。なぜか。かれらじしん，それを他者に気取られることをよしとしないからである。

事例2－5（時岡 2003a: 117）
（前略，わかちあいの場に）来るまでの自分は，父親がいない，そういう劣等感からくる，こう，びくびくしたもので（そういう心もちがあって）人に構えてた部分があるんですよ。妙に強がってたり，みんなをたのしませようとしてたり。そうすることによって自分の負の面を見せないでおこうって，虚勢をはってたんですよ。

消極的な自己概念にはその生成のはじめから他者がつよく関与しているのだが，他者はなおも遺児たちにかせをはめてカラ元気を演じさせる。それは傷ついた自己概念をさらに遺児みずからにも否定させるしうちである。

以上，本節で確認したこれら遺児たちの消極的な自己概念は，やがてほかの遺児たちとの相互作用を経て改編されていく。その過程を次節で見よう。

3. わかちあいの場の構成とはたらき

倉西の2つめの研究「第3章　遺児のセルフヘルプグループの意義とその心的プロセス」は，「親との死別体験を語りあう時間（中略）を中心に据えて実施され」るキャンプ活動に参加した遺児たちの主観的体験を分析し，かれらの心的プロセスを明らかにしている（70-1）。分析は多岐にわたるが，はじめにその全体像を大きく二つに分け，注目すべき諸点を確認しておきたい。

大きな一つめは，死別体験を語り，聴くいとなみに直接的にかかわって生じる遺児たちの心情群である（78）。

（前略）遺児はＳＨＧにおいて死別体験を語ることで感情を解放して《カタルシス》に至り，自身の語りや存在までも受け入れてもらえたと体験する（《受容体験》）。そして他の遺児と出会い，その語りも聞くことで親と死別しているのは「自分だけではなかった」とグループでの《一体感》を体験し《死別体験の普遍化》にも至る。そしてこれらのつながりは遺児達に生きる活力を獲得させていき（《活力の獲得》），遺児は【孤独からの解放】を果たしていく。この同じ境遇を経てきた他者の存在によって【他者を通じた自己への回帰】が起こる。ＳＨＧでは自分が参加者でありながら，他者を支えようという動きが自然に生まれることがある。その他者を支える何気ない言葉かけやひとつの行動が自分を癒し支えると体験することがあり，それを《セルフヘルプ体験》と命名した。さらに，その他者を支えようとする思いが自然に湧いてくることによって，自らの生きる活力も同時に沸いてくることが見られた（《愛他性からくる活力の獲得》）。

分析の前半にある感情の解放や受容の体験は筆者の調査でも，たとえば次のように話された。「（前略，わかちあいの会に）来るまでの世界っていうのは，もう，闘いだったんですよ。虚勢をはってたりとか，他人には弱いところは見せてはいけない。つねに，こう，男としてこうあらなければいけないとか。女々しく泣くなとか。自分の中で勝手にそう思いこんでただけなんですけど。そういう世界と，ここ（わかちあいの会）は違って。泣きたきゃ，別に，泣けよ，って感じですよね。受けとめてやるから泣けよ。大笑いしてもいいし，何してもいい。（後略）」（時岡 2003a: 118）。それらを前提としながら，注目すべきは話し，聴くなかで死別という体験が普遍化し，遺児が孤独から解放されるありさまである。死別にかかわる体験を話して得られるカタルシスのつよさはそれ以前に体験や気持ちを話した機会や程度の関数とみることができるのだが（時岡 2003b: 84），話した機会や程度が少なく小さいほど，遺児たちは自らの存在がいっそう特異に思われ，倉西が言う【孤独】のうちに押し止められるのであろう。これを反転させてみれば，わかちあいの場で話した経験は，遺児たちに自分たちは必ずしも特異ではないと感じさせ，あるいはほかの遺児たちを近しく，親しくも感じさせる。かれらの自己概念はこうして，かたりあいの場を経て消極的なものから積極的なものへと改編されはじめる。なお分析の後半，自分が参加者でありながら他者を支えようとする動きについては後に続く4節でふたたびとりあげることになる。

倉西の分析の大きな二つめは，死別体験にむかう遺児たちの心情の変化や，ほかの遺児と自身とをみくらべて得られる認識群である（78）。

（前略）死別体験を語り・聞き・その場に身を置くことで，自身の内側では死別体験と《直面化》することになる。その《直面化》を越えて自ら死別体験に触れていくことで，抑圧したり忘れていた体験を思い出し，客観化して捉えられるようになる（《想起と客観化》）。（中略）これらの中で死別体験の意味や体験に纏わる感情などにも変化が起き《死別体験の再構築》を果たしていく。（中略）【孤独からの解放】により他の遺児との共通性を見出していくのだが，同時に他者と自分の間に違いが存在することを意識して「わかりあえない」と体験する場合がある。（中略）しかし，この他者との違いを積極的に捉え【個別性への気付き】に至る場合もある。それぞれの死別体験は，似ているようでも突き詰めていくと各々の個別性があること（《死別体験の個別性》），いくら死別体験において重なりが存在しようとも，死別体験以外はそれぞれ個別的であること（《死別体験以外の個別性》），死別後の人生はそれぞれが歩む個別的なものであること（《死別後の人生の個別性》）を意識する契機になるということが見出された。

死別体験を直視したり客観視することの意義はすでに，青年層へのグリーフカウンセリングの立場から「“悲しめない悲哀”」がもたらす心的状況の困難と対比するやり方で示されてきた。すなわち「長年悲しめずに頑張ってきた学生のほとんどは，死別による環境の変化を体験しており，感情の喪失，アイデンティティの喪失が見られることが多」かったり，自己否定感が強い。あるいはひどいうつ状況が確認されることもあり，「どこか現実に生きていない自分に不全感を抱」くことがあるという（加藤 1997）。これらにたいし，倉西の分析と同様，筆者の調査でも，死別体験を語る経験が自己表出と自己概念の再編成をうながすさまが示されている。

事例3－1（時岡 2003a: 118）
自分でもびっくりしましたね。ぼろぼろ泣く。（中略）父親がいないから，すごい“つらがって”たんだっていうことを，自分の中に持ってたのを認められたんですよ。いや，ずっとあったんですよ，きっとね。つらいんだ，つらいけど，でも，そんなん言ってられないから，ずっと構えてたわけですけど。親がいなくてつらかったことを，正直に，外に出せた。つらいことを頭で認めたくないっていう気持ちが，それまではあって。つらいことをずっと持ってたら，ずっとつらいまんまだし，もういいや，と。でもそのつらい体験を，つらいとちゃんと認められた，という（後略）。

事例3－2（時岡 2003a: 120）
忘れたかったこととか，心の奥底に押しこめていたものが，ちょっとずつ出てくる。それが，気づかないうちに自分の行動に反映していたものもある。あ，自分はこれがあったから今までこういう行動をしてたんだな，っていうことが分かったりする。

不意にとまらなくなった涙は感情の再生をもたらし，自己の「つらい」という心情からの逃避をおわらせ，やがて自己に向けた否定感，不全感の修正にすすむかもしれない。あるいは過去の記憶のなかにある自己否定の傾向，たとえば自分は友だちより劣っていると思う心情を，それは父親の不在を価値的な不足や欠落とみなす判断に由来していたのだと考えるようになる。倉西は《死別体験の再構築》にあたる具体的な語りとして「語る中，自分が思ってもないところで涙し，自分の中でそこが大きかったということに気づきました」（76）を挙げているが，先に参照した「“悲しめない悲哀”」や死別を語る経験がもたらした変化をふまえてみるならば，そこには，死別体験それ自体から逃避せず，つらい，悲しいなどの心情を受容するという「再構築」と，ふだんの自分のふるまいや心情を死別の体験と接続させて解釈するようになるという「再構築」が併存している。

ただし当然ながら，倉西がこと細かに挙げているとおり遺児たちの死別体験，死別体験以外の体験，死別後の人生の多様性，個別性にはじゅうぶん注意しなければならない。総体としてみたとき，遺児たちは死別体験を受容し，あるいは日々の生活の文脈のなかにおいてそれを理解していくと言って大過はないが，それら受容や理解の実状はまったく一様ではない。

ここまで倉西の多岐にわたる分析を概観し，本稿の関心からしてとくに注目すべき要点を確認してきた。あらためて列記すればそれらは，①わかちあいの場で話した経験が遺児たちの自己概念を消極的なものから積極的なものへと改編する，②泣くなどの感情の再生がそれまでの心情からの逃避をおわらせたり，それまでの自己否定の傾向の由来に自覚的になる，③心情の受容や新しい解釈の獲得，である。ここからは，遺児たちの変化それぞれを筆者が調査，分析してきたわかちあいの場の構成のなかに位置づけ，かれらの変化が語り，聴く場の構成とどのようにかかわって進行するのかを明らかにしていきたい。

むろんのこと，遺児たちが集まるだけでただちに体験や心情を話せるはずはなく，また話せばとたん，かれらの何かが変わるわけでもない。筆者はとくに一般の参加者をむかえる会の運営スタッフが語りを「引き出す」はたらきかけに照準した（時岡 2006）。スタッフが筆者に教えた要点は「安心感の醸成」である。たとえば筆者の訊いたふたりの運営スタッフは，かれら自身の経験から参加者の心情を推し量り，そこにはたらきかけるように

努めるという。かれらはともに，会に来るまで，死別の体験やその後の生活，心情を誰かに話したいと思うことさえなかった。「父親のことを話す，思い出すとか考えるっていう機会が，ほんとずっと無かったんです。だから，その場でなにを話せばいいのか分からなかった」。それらの由来はすでに本稿2節で見たとおり（【他者との違いの感覚】など）である。きっかけは一般の参加者として，ほかの参加者の話を聞いたことだった。「僕と同じような気持ちを話してくれる人もいて。（それを聞いて）話してもいいんだなって思ったら，すごく話したくなったんですよね」。かれは吐き出すように話し，やがて父親をめぐる心情を対象化しそれに解釈を与えはじめる。「僕のばあいは父親を亡くしたことでぜんぜん悲しくない。だから俺は冷たい人間だし心に傷なんて無いんだって思ってましたけど，逆に冷たい奴なんだっていうふうにずっと思いこんでましたけど，（中略），あ，これが“俺にとっての心の傷”なんだなって，自分のなかで気づいて，自分のなかにおさめることができました」。かれら自身の話した経験を新しい参加者にもしてほしい。そう考えて，こんどは運営スタッフのひとりとして一般の参加者にはたらきかけるように語りかける。「『あ，これもしゃべっていいんだ』『あ，こんなこともあったな』って（いう）思い出しと安心感ですか，話してもいいんだっていうような安心感が（一般の）参加者に得られたらな，とずっと思っていたんです」。そのための工夫としてかれらは，ふだんの生活とは対照的な語りを心がけた。父親の不在に「みんなと同じじゃないとイヤだという感覚」を持った経験から「同じでなくてもいい」と強調したり，何を言ってもいいのだと知らせるために秘めてきた心のうちをさらして見せたり，参加者にできごとや心情をより生々しく思い出してもらうために情動を抑えずに吐き出す，など。これらは倉西の分析のうち，②感情の再生をうながすように作用し，①自己概念の改編のための手がかりを与える。

たほう，③心情の受容や新しい解釈の獲得については，筆者が照準した運営スタッフのもうひとつのはたらき，すなわちかれらの「聴く」作業とのかかわりを精察していきたい（時岡 2007a）。あるスタッフは自身の経験を思い返して言った。

事例3－3（時岡 2007a: 52）

（前略）親の死によって受けたショックとか，寂しい思いしたよとか，ほんと怖かったとか，そういう情景とか感情とかって，絶対，もう消えないって思うんですよ。でも人間っていうのは人間に頼ることができて。あたしの場合だけかもしれんけど，人に話すことでそこから助言もらえたりとか，自分のなかでも整理できたりとか，話すことですっきりする部分もあるし。自分のなかでは穏やかに生活してて「親のことはもういいんだ，これで」っていうので抑えとくんじゃ，その傷はぜんぜん癒やされんくって。ちょっと触れられたら，がーってもう，感情的になってしまって。（中略）そういうときとかに，たとえば（わかちあいの会で知り合った）友だちに電話して，いろいろ話したりとかもできて。そうやってがーっとならずに対処できたりとか。

上の言葉とあわせて彼女はまた，わかちあいの場で経験や心情を話した前後の変化を次のようにも表した。「（わかちあいの場で話したことで，自分は）こういうふうに思ってたんやって気づく部分もあったりとかする」，「それまでは（中略）悲しかったっていうのがすべてやったけど，その悲しかった要素（理由）もいっぱいあったなって。（死別に直接的に

かかわる理由だけでなく）学校の友だち関係もあったしなーとか，それもお母さん（が他界したこと）のせいにしてたなとか」，「私の歴史（できごとそのもの）は変わらんけど，そのふくらみ具合が違う（できごとに与えられる心情の語彙が変わっていく），みたいな」，等々。本稿の関心に沿って注目したいのは，それを「人に話すことで」感情を整理したり悲しみの理由に思いあたったのだという彼女の自覚である。彼女はそこから，わかちあいの場で参加者の語りを聴く役割を務めるようになった。聴くための技法のほか，むしろ彼女が筆者に強調したのは語り手にむかう自身の心のうちである。「受けとめたいっていう。一人ひとりをみとめてあげたい，みたいな。どんな自分でもいいんやよ，みたいな。（中略）あんたがどんな自分でも，あたしはあんたのこと，もっと知りたいって思うし」。ここで過たず適確に捉えておきたいのは，たしかに「受けとめたい」の言葉は彼女の誠実さの表れでもあるが，それはそも，わかちあいの場を構成する基調として努めて守られているという実状である。類似の活動，グループにひろく共有されている普遍的なルールの具体例を，ここでは子どもを対象としたグリーフサポートの概説書から引用してみよう（ＮＰＯ法人子どもグリーフサポートステーション編 2013: 15）。

（前略）子どもの言っていることを解釈するのではなく，子どもが話しやすいようにし，話を聞くことがファシリテーターの仕事です。（中略）話題が変わっても戻さないでください。それが子どもの気分や気持ちであり意思です。話題を戻すことなく，話をさえぎることなく，解釈せずに，子どもが話したいことを話しやすいように聞いてください。（中略）子どもと向き合い会話する時，話の主導権は子どもにあります。あなたが聞きたいことを聞くのではなく，子どもが話したいことを話したい分だけ話すことが大切です。（後略）

このような指針は，遺児たちの，たとえば次のような経験に照らしてもその妥当性をみとめることができる。わかちあいの会の運営スタッフが筆者に教えたある参加者の様子から。「（前略，それまでに誰かと話すなかで，自分には）親がいないっていう話をしたときに，向こう（話している相手）は親がいないってことを知らなくて，『ごめんなさい』とか言われたり。（中略）父の日とかそういうときに，自分はほかの人と同じじゃないんだなってことをすごく感じたって言ってたんです。だから（遺児たちにとって）自分の思いは，ほかのふつうの人たちに理解されないものなんだっていう意識は強い」（時岡 2007a: 46）。それゆえそこから発せられる声を「受けとめる」くわだては，何よりもまず参加者がそれまで口に出すことのなかった思いの丈をじゅうぶん表出できる状況をととのえ，かつ聴き手がそれを臆せずに聴いてはじめて達せられるのである。

さらにこのわかちあいの会では，胸のうちを明かした遺児たちの語りおえた後の心もちにも目をくばる。ある運営スタッフは「話せた後に『話してくれてありがとう』（と声をかける）だとか，手をつないでみんなと気持ちを共有するとか。話せてよかったなっていう，そういう空気はやっぱ意識して作っていこうとは思ってました」（時岡 2007a: 60）。「話せてよかった」を別様に表現すれば，体験や心情を語った行為にたいする自らの肯定的評価である。そこでまわりに気後れすることなく心情を表出できるありさまは，前節の末尾で「自分の負の面を見せないでおこうって，虚勢をは」ると言って遺児がみずからを否定

的に扱うほかなかった場面とあざやかに対照をなす。

4. 体験の相対化と主体化

倉西が研究の全体を『遺児における親との死別体験の影響と意義』と名づけたのは，その「出来事」をただ一時の何ものかとして見るのではなく，ながい時間のなかで遺児たちとのかかわりを変化させる「意義」の集合として追究したためである。とくに3つめの研究「第4章　遺児における死別体験の位置づけとその変化」では，近年の研究動向をふまえつつ「関係喪失による影響という視点と，死別という出来事が引き起こす意義の両面から死別体験を理解していこう」とする（99）。また調査の対象とした遺児たちがおもに大学生であることを考慮に入れ，青年期の心理的な動きに注目して「遺児にとって親との死別という『出来事』を自分の中で位置づけていく作業は，自分自身を世の中に位置づけていく作業にもつながっていくのだと思われる」とも指摘している（99）。本稿の関心に沿って，これらの分析から以下では，遺児たちがわかちあいの場に参加した経験との関係がよりつよい「変化」に照準する。

前節までに同じく，まず，注目すべき分析の諸点を示す（106-7）

（前略，喪失が欠落としてしか位置づけられていない状態からやがて）その後の人生の中で死別体験を《人生の課題》と積極的に向き合い，取り組むことができるようにもなっていく。その中でこれまで否定的側面だけであった死別体験の有意味性にも気付き，否定・肯定の感情を抱える《両価的体験》の状態に至る。これらを【死別体験の主体化】とカテゴリー化した。これらの感情を抱えつつ，死別体験と向き合って整理されていくうちに（中略）死別体験の重みが《相対化》され，自分にとっての位置づけが小さくなっていく。（中略）つまり死別体験に取り組むという時期を経て，死別とは異なる自らの課題や関心に今まで以上にエネルギーを注ぐようになるのである。これらを【死別体験の相対化】とカテゴリー化した。しかしこれらの中で，いくら乗り越えて整理されても死別体験や死別した事実が消えることはなく，そこにまつわる体験や感情も形を変えて存在し続けることがあると気づいていくことが見出され，《残り続けるものへの気付き》とした。（後略）

2つめのカテゴリー【死別体験の相対化】から詳しく吟味しよう。倉西は具体的なＳＨＧ参加体験の語りを次のように紹介している（119-20）。「（前略）『一回目死別体験を話す時は形が無かったものを形にしただけだったので，死別体験についての考えの変わりようが無かったんです。けど，二回目三回目と喋っていくと，自分の死別体験と人の死別体験を比べられるようになって』，死別体験の変化や整理が進んでいったという。ただ，他の遺児と死別に対する『解釈に関しては分かり合えない』とも体験した。／これらを経て『親を亡くした体験は，仕方無いですね。もはや。』と区切りを示し，現在は『死別体験を消化してきている気がする』のだという。『死別体験は昔はそれこそは自分の人生の全てだったんですけど，どんどん相対的にちっちゃくなってきている気がします』（後略）」。これらの語りのうち，自他の体験を比べられるようになったという点に照準したい。わかちあいの場はいろいろの経験や心情を知る機会でもあり，それは体験の相対化をうながすようにはたらくのである。筆者の調査では，自死遺児の一人から，他界の経緯や死別時の

年齢が異なる遺児たちから聴いた経験のもつ意味が話された。

事例4－1（時岡 2008: 91-2）
（前略，わかちあいの会でほかの遺児の経験を聴いたことについて）僕はそれが大きかった。はじめての会で（自分とおなじ）自死遺児の話を聴いたのもあるし，一方，幼い頃に（父親を）亡くした，だからお父さんの記憶がないっていう（遺児の話を聴いた）ことに僕はすごい衝撃をうけて。お父さんとの楽しい思い出もないんだっていうことに，自分はまだ幸せだったのを感じた部分もあった。自分とおなじ人がいる，ああ，おなじなんだっていうのもあったけど，お父さんの思い出がないっていう子の方が（それを聴いて感じたことが）大きかった。（中略，自分より）もっと苦しい思い，苦しい思いもできない子もいたってことだし。亡くなったときの悲しさも感じなかった子，それも，もっとつらいんじゃないかなって思ったし。

すでに倉西が描いたとおり死別体験の「重み」の変化や大きさの変化（「ちっちゃくなってきている気がします」）が【相対化】の帰結としてあるのだが，その過程で，倉西の事例も筆者の事例もともに自他の「体験を比べた」さまを教えている。相対化とはそのとき，自身の体験をいろいろの基点として他者に思いをいたす思考の回路と，他者の体験を基点としながら自身を見なおす回路とが交わって織りなす認識の総称である。わかちあいの場を経験したかれらは，体験や心情をとらえるための基点をいくつも得ることで，自身のそれを社会的なひろがりのなかに置いて考えたり，故人の他界や遺児として直面した具体的なできごとを自身の人生の俯瞰図のなかで意味づけたりするようになる。

これらの基点の獲得にこそ，遺児たちが体験や心情をたがいに話し，聴くわかちあいの場の構成がさまざまに与っている。じっさいには複雑なその過程を理解のために図式的に整序して示せば，それらはおおよそ表出と受容に大別される。前節で見たとおり，わかちあいの会では運営スタッフが，一般の参加者のためにみずからの体験や心情を積極的に語って努める。それは参加者一人ひとりをうながすようにはたらき，やがて心のうちが口をついて出ることもある。このようにわかちあいの時間のなかで，運営スタッフ，ほかの参加者，自分自身の三者がかかわりあいながら【相対化】のための手がかりを表出し，共有していくのである。

表出された体験や心情は，しかし，そのまますべての遺児たちに同じように届き，同じように作用するわけでもない。年長の運営スタッフは筆者に，語られた言葉がほかの遺児に受容されるまでの回路の多様性を次のように教えた。

事例4－2（時岡 2003a: 120）
一概に親がいないから話せるかっていったら，そうではなくって。ま，誰かの話を聞いて共通点を見出すんです。もちろん自分から，こういう機会しかないから話したいっていう子もいる。そういう子が話したとすると，たとえば死因が同じじゃないにしろ，授業参観のときに僕は辛かったっていう話をしたとするじゃないですか。ぜんぜん死因は違っても同じ思いした子はそういう思いがあるから，そこが切り口になって話し始める。たとえば一人の子が，みんなはお父さんが大好きだった，死んで悲しかったって言ってるけど，僕はそうじゃない，僕は大嫌いだった，死んでよかったって今でも思ってるっていう子がいたとするじゃないですか。それが切り口になって，

自分もそうだった子が話せるんですよ。（後略）

冒頭の指摘，遺児たちがただ集まっても何も起こらず，そこに意図的なはたらきかけがあることはくり返し述べたが，ここでは「切り口」すなわち遺児たちが語り，聴くための手がかりが網の目のように連鎖していくさまに照準しよう。もっともひろくゆるやかな繋がりは「遺児」という属性である。それゆえ話せること，聞きとめて自分の状況と比べてみることのできる話題もたしかにある。けれどたいていの場合，あまたの相違のなかにわずかな類似をみとめることができる程度であろう。そこから【死別体験の相対化】にいたる認識を得るために，かれらは込み入った受容の手続きを経る。

たとえば，不慮の事故と自死，社会的にはおそらくまったく違う評価のもとに切り分けられる他界の理由であっても，遺児たちが父親参観日にいだいた寂しさや悔しさはたがいに痛切に感じ取ることができる。あるいは，これまでは“父親を亡くしたかわいそうな子ども”としかふるまうことができなかったが，今，ここにいるのはすべて遺児であるからこそ「僕はお父さんが大嫌いだった」と本当を言える。たがいの何を「おなじ」と見て，何が「ちがう」のかは，それらがどのように聞こえ，口に出したいと思うかにより都度，異なる。類似に重きをおくか，相違を言いつのるかも時々である。先の事例４－１では故人の他界の理由がいったんは注目されているが（ほかの自死遺児の話を聴いて大きく心が動いた），むしろ死別の経緯よりも死別の年齢につよく焦点が当てられ（幼い頃に亡くしたから故人の記憶がない），語り手にとってはそれこそがはっきりと思考のなかに受け容れられた。またひとたびそうして獲得された基点がかれみずからを顧みさせ，自分には故人の思い出という「幸せ」があると感じるようになる。他者の体験や心情を相対化しつつ受容し，その受容が自身のそれらを相対化した一例である。

前段の経過はまた別様に，類似の体験を聞きとめてみずからの自己概念を変化（「自分とおなじ人がいる」）させた遺児が，自己と他者を比べみてさらに次の変化（「自分はまだ幸せだった」）へと接続させる，その連鎖であるとも言える。死別体験の相対化はすなわち，自己概念の相対化である。

ここまでの考察は，ふり返れば，前節で味読した倉西の「《死別体験の再構築》」を微細に記したものとも約言できるだろう。印象的な遺児の言葉を再録すれば，ほかの遺児たちが話すのを聞いて「話してもいいんだなって思ったら，すごく話したくなったんですよね」，すなわち遺児たちばかりのその場では死別をめぐる話題がなんら特異でなくなるという相対化。悲しみを感じないことこそが「“俺にとっての心の傷”なんだなって，自分のなかで気づいて，自分のなかにおさめることができました」，すなわち新しい解釈を与えて位置づけを変えるという相対化，など。いずれもわかちあいの場の特性に由来して，すなわち，ふだんの生活では期待し得ない遺児ばかりの時間と空間のなかで，さまざまな死別の経緯やその後の生活，心情などを聴きとめることによって，死別体験をめぐる「おなじ」と「ちがう」が《再構築》されていくのである。

自他の死別をめぐる経験を相対化して受容し，みずからのなかに位置づけることができた遺児たちを，倉西は「死別体験の有意味性に気付」いたと表した。その具体的な語りのひとつが「『（前略）あっ，これはあたしの宿命だったんだなって。あの時が無かったら今の自分は無いだろう』とまで思えるようになっ

た。現在は死別体験（中略）等の体験は『自分の人生の中のほんと一部だったなって』思えるようになっている。『それを乗り越えるために，自分はそういう課題を与えられて魂を磨いているんだろうなって。磨かないといけないんだな』と思うようになっている」（115）である。この語りは直接には死別とその後の母親との関係を教えているのだが，これとあわせて，そのおなじ遺児が別のところで「他の遺児を支えよう」と思い「自分が支えていかないといけない人がいるんだなっていう存在を目の前にして，ちょっと強くなった気がしました」（76）とも語った事実に注目したい。これは本稿前節のはじめに紹介した「《愛他性からくる活力の獲得》」の一例として倉西が挙げた語りである。彼女は死別体験によって「磨かれた魂」を「人を支える」ことにさしむけ，遠慮がちにそのような自身を「ちょっと強くなった気がした」と評価する。倉西はＳＨＧの意義を言うなかで「《愛他性からくる活力の獲得》」を挙げ（第3章），遺児における死別体験の位置づけの変化を言うなかで死別体験の有意味性に気付く「《両価的体験》」を挙げた（第4章）。倉西がこれらを別章であつかったのは前者がとくにＳＨＧに焦点化し，後者が人生全体のなかでの死別体験の位置づけを論じたからであり，本稿としてはこれらを統合してわかちあいの場における遺児たちの他者支援を分析する手がかりとし，死別体験が【主体化】されるありさまの理解へと歩を進めよう。

ある自死遺児は，自分の体験を話すことそれじたいがほかの遺児に与える影響に意義を見出して筆者に語った。

事例4－3（時岡 2007b: 111）
自分史（語りあう時間のこと）って（進行上の工夫から）最初に話すリーダーと途中で話すリーダーがいるじゃない。私，自分から一番最初に話したいって言ったんだ。その場（グループ）にいた自死遺児の子（一般の参加者）は初めての参加だったの。だから（以前の）私みたいに誰にも話したことなくて，ひとりぼっちだと思って，きっと。私がナオ（この事例の語り手が一般の参加者として初めてわかちあいの会に来たときのグループリーダー・自死遺児）の話を聞いたときに感じたみたいな安心感を与えてあげたかった。そう思って話した。（後略）

彼女はここにいたるまでのわかちあいの場の経験から，他界した父親にむかうみずからを変化させてきたという。「お父さんのことを考えれるようになったね，正面から。考えるのってさあ，辛いじゃない。一人じゃできないんだよね。考えるのは自分がすることだから一人でやることなんだけどさあ。ナオと出会って，ナオと話をして，私はお父さんのこともっと知りたいと思ったの」（時岡 2007b: 110）。ほかの遺児との語りあいが死別体験を主体化させ，主体化を具現して語りあいの時間の先導役を務める，わかちあいの場はこうして死別体験をめぐる主体化と支援の連鎖から構成されていくのである。先導してほかの遺児たちのために語った者は，さらに，自分の死別体験が“役立った”実感を得ることでいっそう主体性のいろあいを濃密にする。

筆者に印象ぶかいのは，事例4－3の語り手が目の前の参加者をたとえて「私が感じたみたいな」と過去の自分をひきあいに出したひとことである。すぐそばの参加者のようすは彼女につよい実感を与えるが，その実感はまた，彼女自身の過去に照らしあわせて得られるものでもある。少しく解釈の幅をひろげるならば，そこで彼女がほかの遺児のためにと思って努めるすがたは，あたかも数年前の

彼女自身にむけた遅ればせの心づくしのようでもある。先に筆者は死別体験が主体化された一例として遺児たちの他者支援をみたいと書いた。また前段のとおり，他者へのはたらきかけは倉西の言う「体験の有意味性」を可視化させやすい。それらにくわえて筆者は，彼女が「ナオ」にみずからを重ね合わせつつ過去の彼女自身と内的にかかわりあうこと，またそれができるみずからのありさまの認知という自己概念の変化をも死別体験の主体化のひとつに数え上げたい。

ところで，筆者や倉西が考察の対象としたわかちあいの会の主催団体は，奨学金の貸与や遺児のためのケアハウス建設などさまざまな支援活動を展開してきた（倉西の著書にもいくつか，そのごく一端が垣間見える記述がある）。本稿の射程は遺児たちのわかちあいの場にかぎられるが，筆者の聴いた遺児からはその場をはなれ，さまざまな支援活動と関連する死別体験の主体化，相対化にかかわる語りも得られている。考察の最後にそのひとつを紹介したい。

事例4－4（時岡 2008: 83）
いままでは“自分のこと”“自分の経験からできること”が頭にあったんです，それが中心で。いまはそれ以外の，いろんな人とつきあっていくなかで，いろんな人の話とか聞いていくなかで，（高校生のときに父親が自死した自分とは違って）小さいときに（親を）亡くした人，病気で亡くした人，ほかのいろんな人，親を喪っただけじゃなくて親しい人を亡くした人も，もっといろんな人が自分よりも苦しい思いしてるんだなってことをすごい感じてきて。（中略，自分の苦しみだけを見ていた頃から，やがていろいろな人々の苦しみに意識が向くようになって，遺児・遺児家庭への支援活動）へのほんとの意味での参加になってきたのかな，と思います。

この事例の語り手はこれまで「自分の経験からできる」活動，たとえばわかちあいの場でほかの遺児たちのために体験や心情を話し，聴く務めを重ねてきた。倉西の【死別体験の主体化】の好例である。さらにそこからすすんで自身の関心に注力するさまはまさに【死別体験の相対化】にほかならない。ただし，倉西は【相対化】を言うにあたって「死別とは異なる自らの課題や関心」を対置させ，ある遺児の意識・心情に占める死別とその他のことがらの大きさを重視した。むろんそれは狭義の「死別」すなわち直接的な故人との別離に由来する意識・心情を指しているのだから，事例4－4の語り手がとりくむ遺児・遺児家庭への支援活動はすでに「死別とは異なる課題や関心」である。

この語り手はまた別のところで，心のうち，故人とのつながりを筆者にこう話している。父親の他界は「自分自身にとっては，ずっと心にしこりとして残っていて，今後生きていくあいだの場面場面において（自分に不都合なことを）そのせいにしてしまったりとか，そういうものであったのが，逆にそういう体験をしたからこそ辛い人の気持ちを理解しようって思えるようにもなったし。（それが）自分を構成しているひとつの部分であることは最初も今も変わんないんだけど，自分を構成しているもののなかで“いい器官”になったのかなあって（思うようになった）」（時岡 2005）。「ひとつの部分」とはまさにかれの自己概念の構成に死別体験が大きくかかわるゆえの表現だが，筆者はそれを，体験にむかうかれの心もちが他界した父親とのかかわり方と併行してあることの示しであるとも聞いた。かれは「（もし父親といま）話ができるんだったら，（僕にたいして）申し訳なく思

わなくてもいいよ，っていうことですかね」と筆者に言った。自己概念の変化はやがて，故人との関係性の変化にもつながっていくようである。

おわりに

各節の要点をまとめ，考究の全体像を示す。

父親あるいは母親との死別，その不在をなにかしらの欠落とみて，父親や母親のいるほかの子どもたちとの違いが価値剥奪的に認知されたとき，遺児たちのなかに消極的な自己概念が醸成される。かれらの生活空間，とくにおなじ年ごろの子どもたちと過ごす学校や近隣に似かよった状況の世帯が少なければ，消極的な自己概念は改編の機会を得ることもなく，むしろ他者との関係を通じていっそう根深いものとなっていく。倉西の研究に筆者の調査，分析を重ね合わせつつ2節でその過程をみた。

死別やその後の体験，心情を遺児どうしが語りあう「わかちあいの場」は，かれらを日常とはたいそう異なる環境のもとにおき，その構成の特質によってかれらの自己概念の改編をうながす。遺児たちがつどい，遺児であることがたがいの相違ではない時間をともにして，かれらは一方でみずからの属性（親と死別した遺児）が消極的に評価されない経験を得ながら，他方では「遺児」としての事情や心もちがさまざまに異なって一様ではないとも知る。倉西が挙げた《死別体験の再構築》という変化は，筆者の調査，分析が明らかにした運営スタッフのはたらきかけ，すなわち一般参加者から語りを「引き出し」それを「聴く」ための工夫や努めによって生じ，定着する。倉西の言う「死別体験の意味や体験に纏わる感情など」に起きる変化は，あわせて《死別体験の普遍化》や《活力の獲得》，体験の《想起と客観化》をともないながら遺児たちの消極的な自己概念を積極的なものへと再編成していく。筆者の調査，分析で得られたかれらの語りは倉西の研究に沿って整理され，わかちあいの場での経験が自己概念を改編するありさまとして3節にまとめられた。

倉西はその研究目的に沿って，死別体験の位置づけの変化が遺児の生き方におよぼす影響の検討を進めた。筆者はその成果に拠りつつも，あくまでわかちあいの場の特質と遺児たちの自己概念の変化に照準し，倉西が生成した体験の相対化，主体化という理論枠組みを援用して考察をふかめた。4節はそのようにして，死別体験の相対化と主体化が遺児たちの自己概念の変化とあいまって，あたかも循環構造のように併行してなりたつ過程を解析したものである。わかちあいの場で他者の体験や心情を相対化しつつ受容した遺児たちは，かれら自身のそれらも相対化し，自己概念の再編成をはじめる。その遺児たちがみずからの変化を好ましいものとみて，あらたにおとずれるほかの遺児たちにむけて積極的に死別を語り，その遺児たちの自己概念の再編成をうながす。倉西の言う「死別体験の有意味性」への気付き，すなわち主体化は，わかちあいの場では一般の参加者にむかう運営スタッフの活動としてよく観察される。

本稿の議論がつねに照準してきたのは遺児たちの自己概念の再編成だが，それは死別に由来する消極的な自己概念の生成（2節）にはじまり，語りあいの経験を契機とし（3節），みずからのなかにおいて死別体験の位置づけを変化させる（4節）プロセスである。4節については倉西と筆者に射程の違いはあるが，ともにＳＨＧでの経験を重視することでは一致している。言い換えれば，筆者の聴いた遺児たちは例外なく，倉西のばあいはその大半がわかちあいの場への参加経験を持つ。両者

とも，ＳＨＧから遠くはなれた，そのような経験のない遺児たちへの接近とあらたな調査，分析が今後の課題となろう。

文献

安藤清志・押見輝男編，1998,『対人行動学研究シリーズ６　自己の社会心理』誠信書房.

あしなが育英会編，1997,『お父さんがいるって嘘ついた』廣済堂出版.

伊藤伸二・中田智恵海編，2001,『知っていますか？セルフヘルプ・グループ　一問一答』解放出版社.

自死遺児編集委員会・あしなが育英会編，2002,『自殺って言えなかった。』サンマーク出版.

加藤美智子，1997,「グリーフカウンセリング――青年たちが体験した突然の親との死別…悲しめない悲哀から…」松井豊編『悲嘆の心理』サイエンス社，219-42.

倉西宏，2012,『遺児における親との死別体験の影響と意義 ── 病気遺児，自死遺児，そして震災遺児がたどる心的プロセス ──』風間書房.

ＮＰＯ法人子どもグリーフサポートステーション編，2013,『子どものグリーフを支えるワークブック～場づくりに向けて』梨の木舎.

時岡新，2003a,「言わないという不快，話せるという安堵」『社会学ジャーナル』筑波大学社会学研究室，28: 113-24.

―――，2003b,「故人をめぐる対話」『年報筑波社会学』筑波社会学会，15: 82-93.

―――，2004,「『当事者グループ』経験の諸過程」『社会学ジャーナル』29: 199-217.

―――，2005,「わかちあい，むきあう」(未公表).

―――，2006,「分かちあいの会で語りを『引き出す』作業について」『金城学院大学論集 社会科学編』3(1): 1-14.

―――，2007a,「分かちあいの会で語りを『聴く』作業について」『金城学院大学論集 社会科学編』3(2): 44-65.

―――，2007b,「資料・自分と，誰かのために (上)」『金城学院大学論集 社会科学編』4(1): 99-114.

―――，2008,「資料・自分と，誰かのために (下)」『金城学院大学論集 社会科学編』4(2): 82-96.

山口勧，1990,「『自己の姿への評価』の段階」中村陽吉編『「自己過程」の社会心理学』東京大学出版会，111-42.